

---

DATE

メジロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DATE

### 【Nコード】

N8593S

### 【作者名】

メジロ

### 【あらすじ】

歌う為の作り物の『僕』と、ちよつと変わった『マスター』の話。

『僕』のモデルはボカロの青い兄さんなので、にじファンに移すか迷い中。

ビクビクしながら投稿中。エロの境界線が分からないのでご意見募集中。

## DATE：1 顔の見えないマスター

DATE：1 顔の見えないマスター

僕が目を覚ました時、初めて見たものは顔の見えないマスターだった。

人の形をしたナニカ。

知らず震えた僕にソレは笑いかけたような…気がした。

『やつと、会えた』

そんな声が聞こえてきた…気がした。

歌う為に生まれた作り物のデータ。

それが僕。

初めの内は売れなかった僕が、売れるようになったのはつい最近のこと。

たくさんの方がいろんなマスターの元で歌を歌う。

でも、顔の無いマスターに出会ったのは僕が初めてだったろう。

そして僕はソファーに座らされ何故かお茶をふるまわれていた。

「あの…ますたー？僕、歌が歌いたいです」

向かいに座ったマスターは、静かに無言でお茶を飲んでた。

どこを見ているのか分からない。表情も分からない。

そんなマスターに僕は再び半泣きになりながら訴えかける。

「あのあの…ますたー？僕、頑張りますから…お願いします」

「君を買ったのは歌わせるためじゃないんだ。ごめん」

初めて聞いたマスターの声は甘く柔らかく少女の声のようだった。

それにしても…。

あうーあうー、いきなりバツサリ切り捨てられたよー。

ハハハ…。

そのまま沈黙の行に戻ってしまった。  
やがてコトリと茶器がテーブルに置かれる音がして、マスターがソファから立ちあがる。

ビクビクしている僕にかまわず傍らを通り、マスターはPCの前に移動して何かを印刷し始めた。

いくつか画面を立ち上げているのがマスターの肩越しに見えた。そして振り返り手招きをしてきたので、僕はそろそろとマスターの元へと歩み寄る。

印刷し終えた紙とマイクとを手渡され、歌わせてくれるのかな？と、期待して紙に目を落とそうとしたら、PCから僕の歌声が聞こえてきた。

画面の中の僕はすごくステキな歌を歌っていた。

「ますたー…良い歌ですねー」  
思わず顔の綻ぶ僕にマスターはうなずき、次から次へとたくさん僕の歌声を聞かせてくれた。

「いろんな歌があるんですねー。いろんな歌い方があってですねー」  
「今のは神調教の曲。私には無理…だから君には歌えない。ごめん」  
「そんなー。あきらめないでくださいようー。僕、頑張りますから」  
ところで…と、僕はそこで手元の紙を見て固まった。

書かれていたのは…。

『お前の息子を返してほしくば一億円用意しろ』

「ま…まままま、ますたあー？もしかしてこれ僕が言うんですかー？」

こくりとうなずく、顔の見えない恐らく…未成年者。

僕の背中を冷や汗がつつつーと伝い落ちたような気がした。

たぶん僕の顔は青ざめてる事だろう。

僕のマスター、いきなり犯罪者ですかー？  
しかもまだ未成年ですよー？  
どどどど、どうしよう？泣きたい…。

焦る僕のマイクを握りしめた方の手に、マスターが上からそつと手を重ね言う。

「いいよ」

待ったナシですかー？と、内心絶叫しながら僕は読み上げる。

「お前の息子を返してほしくば…ほしくば…一億アイス用意しろーっ」

とっさに口をついて出た言葉にしばしの沈黙の後、マスターが言った。

「どんだけアイス好き…」

「最後のところ声が裏返っちゃいましたー」  
うるたえまくった拳句、必死に言い訳のようなものをする僕を放置して、マスターは他の部屋へと行ってしまった。

うとう。やっぱりアンインストールされちゃうんでしょーかー。  
しばらくして戻ってきたマスターは、握りしめたままだった紙とマイクを僕から奪う。

肩を落とした僕の手を引きソファーに座らせると、目の前にアイスとスプーンを置いた。

「ご褒美。食べていいよ」

驚いて見上げたけれど、マスターの顔はやっぱり見えない。  
けれども声だけは、とても優しくかった。

「直営店の。美味しいよ」

カップの中のアイスは丸くて、食べたら柔らかくて美味しかった。  
僕をインストールする前に、マスターが買ってきてくれたのだから。

「ねー…ますたー。あのですね…」

アイスに励まされて僕は言う。

「犯罪は…よくないですよ」

「…バカ？」

返ってきた短い言葉に軽く傷つきながら、僕は言い募る。

「あなたの声はアイスみたいに甘くて柔らかくて滑らかで優しいのに…」

「天然？」

マスターは再び短い言葉を僕に言った後、ただ黙ってカップをもてあそんでいる。

しばらく黙々と僕もアイスを食べていた。

そしてマスターが語りだす。

「君って、ホントにアイス好きだったんだね。それと歌うたいなんだね」

「ふえ？」

急に言われてスプーンを咥え変な声で返事をした僕にマスターは問いかけた。

「オサムライと弟と、○○○○するならどっち？今なら選べるよ」

「ますたー？○○○○ってなんですかー？」

「B.L. やおい。腐。君を買う人って、けっこうそういう方面の人も多いって、会社に言われたりしなかった？」

「げほっごほっ…ごほっ。ま…まままさかますたー?!」

「うん。君が犯罪って思ったセリフそれに使うんだだけだね」

顔の見えないマスターは…腐さんだったようです…。

犯罪者じゃ無くてよかったけど…よかったけれど…!!

僕に歌を歌える明日は来るのでしょうか？

DATE：1 顔の見えないマスター（後書き）

：BL好きな人は『ますたー』を男性で想像してあげてください。  
それ以外の方は、『ますたー』は女性だと思っただけでください。  
青いお兄さん好きな時点でナニカイロイロ悟っただけだと幸いです。

モデルにした青いお兄さんは『歌う為に作られたもの』ではないですよ。

もともとはバックコーラスとかで使う音源の一つでしかなかったそうです。

物語の扱い上ちょっと変えています…。

## DATE：2 時間の歪曲

DATE：2 時間の歪曲

今日の僕もマスターに怯えていた。

顔の見えないマスター。

僕より頭二つ分くらい背の小さな、幼い少女のような声の持ち主。何より…何故無言なんですかねー？…シクシクシクシク。

ソファーに向かい合わせで座り、お茶を飲む。無言で。

「オサムライと弟…」

いきなりのマスターの発言にビクンっと、僕の肩が揺れた。

何より内容が恐ろしすぎる…僕は目を見開いて必死で見えないマスターの顔色をうかがう。

が、マスターは言い淀み、そのまま黙りこんでしまった。

カチコチと時を刻む時計の針の音とPCのモーター音しか聞こえない部屋で、ゆっくりと緊張が張り詰めて行く。

そのまま固まっていた僕の頬を暖かいものが伝わり落ちて行った。

「あ…あれ？」

そのまま僕はボロボロと泣きだしてしまった。

袖で拭うも後から後から溢れ出すそれに、胸が軋み出すほどの情けなさを感じて、口の端から嗚咽が漏れ出していく。

「ず…ずびばせん…」

無言でティッシュの箱を差し出すマスターに、僕は涙声で謝った。

「やっぱり買うの辞めとく」

「ううえ…？」

「君だけでいい」

会社の事を思えば売れた方が良く、でもビーエルとか嫌だし、でも弟と妹もいたら楽しいだろうし、この無言の苦痛が少し和らぐ

かもしれないし、でもでもオサムライも弟ともマスターが昨日言っていた事とか考えるだけで目眩がするし…、と、僕はだいぶ混乱して泣いていたので、マスターの最後の一言が頭に届いたのは、マスターが僕の前にアイスとスプーンを置いてくれた時だった。

君だけでいいって、マスター今言った？言ったような気がするんだけど…。

「あの、ますたー？」君だけでいい』って、今、言いました？」

マスターの顔は相変わらず分からない。

けれど、うなずくのは見えた。

嬉しいような恥ずかしいような気持ち…暖かい何かがこみ上げてきて、たぶん、今の僕の顔は首まで真っ赤だ。

暖かくなつた心と目の前のアイスにも励まされ、僕は思い切つて気になつていた事を聞いてみた。

「あのあの、ますたー？昨日、僕をインストールした時『やつと、会えた』って、言いました？」

今度はマスターはうなずかなかつた。

「あれ…？ええつと、僕のキノセイだったみたいですよ…」

勢い込んで尋ねた事への後悔でしょんぼりしながら、それでも最初の頃よりは何故かずつと安心して、僕はアイスを食べるのに専念することにした。

「セクハラしたら君は泣きだすんだろうな…」

頬杖をつきながらぼそりと呟いたマスター。

「ほえ？」

もう少してアイスを食べ終わるといふ頃に何かマスターが変な事を呟いたような気がした。

ききききつとキノセイ…きつと冗談ですよ？誰か冗談だと言つて下さいーっ！

「言つてないよ。思つただけで」

「セクハラがですかっ?!」

「うっん『やっと、会えた』の、方」

「えっ？」

「そんなに期待されたら……」

「うっ？」

急に視界が遮られたと思ったら、一瞬だけくちびるに柔らかい感触。

「ラズベリー味……」

混乱の極みも極みで一時停止していた思考が、マスターの声と共に動きだす。

両手で口を覆い絶句した僕は、ボロツと零れ落ちた何度目かの涙と共に……顔が赤くなつていくのを感じていた。

「また泣いてる」

マスターの言葉にまだパニック状態の僕は何も返せない。

「長くなるよ。話」

そう言い置いてマスターは話し出した。

「私が15の時、ゲームの中で歌って踊る君を知った。

心の宿らない、魂の宿る、誰でも無い君の歌声を好きになった。

君が発売されたのは。それから15〜6年後のこと。

秋葉原で君らのパッケージを見ていたんだけど、私の好きな君の顔じゃなくて分からなかった。

パッケージから聞こえてきた歌声も、全く違ってたし音痴だったから。

2年くらい前、双子の歌の題名とか内容とか知り合いの間で話題になつてた。

最近それを思い出して、検索いろいろかけててやっと君の歌を見つけた」

「だから……『やっと、会えた』」

長いと言った割には短かったマスターの話。

区切るようにして吐き出すように最後に言った言葉は、すごく疲れているように聞こえた。

僕には分からない、重すぎて、単純には嬉しいと喜べない何かが入められているような。

いつの間にか僕の涙は止まっていた。

そして時計が4つ鐘を鳴らせば、マスターが決めた僕の時間の3時から4時へ。

ただ黙って、やや俯きながらマスターは、PCの前に立った。

だから四角い箱に戻る前に、僕はマスターを抱きしめて前髪をかきあげ、囁きと共にキスを落とす。

「やっと、会えた」

マスターの言葉や思いに比べ、きっと僕のは軽過ぎるけど、それでも。

ただ、なんとなく、そうするべきだと思ったんだ。

きっと、明日は僕は死ぬほど後悔するんだろうなあと、心のどこかで思いながら。

DATE : 2 時間の歪曲 (後書き)

この時点で『ますたー』側の事情の正解が分かったら神です。

『僕』が前半受け身なのでツッコミどころ満載なのに、さらっとスルーしてくれています…。

何してん?!

DATE : 3 僕の願い、マスターの望み

DATE : 3 僕の願い、マスターの望み

3日目、3時になっても僕は呼び出されなかった。

マスター……。

3時になるまでの僕は昨日の事を思い出しては、全身に火が点いたような火が噴きだしそうな、そんな羞恥心に苛まれていたのだけだ。

昨日の時点で既に後悔してたけど、甘かった。

3時が過ぎると僕の胸には、不安と後悔が時間と共にどんどん刻まれて行く。

まだ僕は一度も歌を歌っていない……、歌う前にきつとマスターに嫌われてしまった。

日付が変わりそうな頃にやっと呼び出された。

真っ赤に目を泣き腫らした僕がそこに居たのだと思う。

「あゝ。やっぱり泣いてたんだ。アハハハ！へたれえ〜っ」

僕を呼び出したのはご機嫌に酔っぱらった顔の見えない女性だった。

ビックリし過ぎて涙は止まってしまったけれども。

てか、このヒトダレ？

「あの……ドチラサマデスカ？ますたーは？」

「アタシはあんたのマスターだけど〜？」

一瞬嫌な事を考えてしまった。

僕はマスターに捨てられたのだろうか。

けど、アンインストールされてないし、周囲を見回しても部屋も変わった様子はない。

ケラケラと笑い声をあげながら片手に持った焼酎の一升瓶を豪快

に煽る女性の声は確かにあのマスターと同じ声で、背丈も確かにマスターと同じ、だけど。

僕はふるふると首を振った。

「アタシじゃ気に入らないってか？」

信じたくないとかでは無くて、チガウ。

僕はふるふると首を振り続けていた。

「アタシらの顔なんて見えてないだろうに、見わけつくん？健気だねえ？」

楽しそうな声でそう言われ、僕はハツとして顔をあげた。

「あのっ！ますたーはっ?!」

「いや、だからねえ？アタシは成る気これっっぽっちもないけれど、あんたのマスターよ？」

ダメだ。この酔っぱらい…どっかの酒乱と一緒にだ。

笑い転げている女性の前と泣きそうな僕の前には、いつものようにそれぞれアイスとスプーンが置かれていた。

アイスをスプーンですくって食べようとしたけれど、いつもと違って硬くてスプーンが入らない。

「あー、もう少し溶けるまで待った方がいいよー？冷凍庫から出したばかりだから」

アルコールの香りの充満したいつもとは違う部屋の空気に、じわりと僕の視界が歪む。

「可哀相にねえ。あんたもお酒飲む？」

それどころじゃない心情でただ首を振るしかない僕に女性は言った。

「明日もあの子さ、たぶんあんなの為にアイス買ってくると思うから、泣くのやめな」

マスターに似た顔の見えない女性は、マスターに似た違う声で優

しく言ってくれた。

硬いアイスを見つめたまま、悲しくなりながら僕は女性に聞いてみる。

「僕のどこがいけなかったんでしょうか？」

「ん〜？あなたのことを自分と同じ作られたデータだと思ってたのに、心があるって思ったからじゃねえのぉ〜？」

「ええええっ？！ますたーってデータなんですかっ？！」  
思わず顔をあげた僕。

「おおっ？みなさ〜ん！バカな子がやっつと！まともなところに喰いつきましたよ〜っ？！」

いかにも驚いたような声で叫んだ女性に、軽く傷つき頭を抱えて僕は呻いた。

「ま〜、冗談はともかくとしてさ。データって言うか〜」

そこでぐいっつと一升瓶を一口煽り、女性は続けて言った。

「アタシはあの子じゃないから、詳しい事は分からないけど、たくさん音を持ってる子だわね」

考え込むようにして言われた理解不能な言葉に、僕は聞き逃すまいと必死に耳を傾けた。

「音…ですか？」

「うん。雪の降る音って聞いたことある？風の音では無く、雪の音」

「雪の音ですかー？」

「雪って音を吸収するからすごく静かで、他の音が遠くに聞こえるでしょ？あの子は雪と同じね」

「雪？…？」

「あの子はたくさん音の音を聞いてるんよ〜。耳に良い音だけじゃなく、心が壊れるような音も全て…」

ふと、途中で言葉を切った女性は一升瓶を明かりに透かして立ち

あがった。

「ゴメン。ちょい酒切れたから取ってくるね〜」

女性が席を立った事をこれ幸いと、僕は情報を整理し始めた。

マスターは音を吸収する？雪で、耳に良い音、心が壊れる音、たくさんの音を聞いている???

15の時に僕を知って、でも僕が発売されたのはその15〜6年後。

パッケージの絵で僕と分からなくて、パッケージから僕らの歌声を聞いていた。

何かいろいろおかしい気がする。

マスター…30歳過ぎてるよね…。聞いたら、怒るかな？

「おまたせ〜」

上機嫌な酔っぱらいは帰ってくると、僕の前に氷の入ったグラスを置いて琥珀色の液体を注ぎ始めた。

「あのー、僕…そんなに呑めませんか？」

「いいのいいの。キブンだから〜。アハハハハハ」

「うううー…人の話ぜんぜん聞かないよー…このヒト」

僕はとりあえずグラスを持ちあげ、ちびりと舐めて…途端に咽た。

「げほっごほっ…ごほごほっ…これ…ごほっ…なんですかー？」

「アタシのと〜っておきの！ブランドー」

咳き込みながら、上機嫌に言い放った女性の方を見ると、赤い唇が笑みの形になるのが見えた。

「あれ？口元…ホク口ありますー？」

「ん〜っ？ええええええっ！マジで？見えてるのっ？！げえっ！！

！見んなっ！このヘンタイツ！！！」

驚きうるたえた女性はアイスのカップをこちらに投げつけつつ一息に叫ぶと、顔を両手で覆い隠して伏せてしまった。

辛うじて投げつけられたアイスをキャッチした僕も、女性の反応

に驚いている。

「ヘンタイって…」

アイスのカップを両手で持ちながらしばしの間、僕は絶句していた。

しばらくして顔をあげた女性は、どこかサバサバとした調子であつげらんと言いつつ放つた。

「まゝいっつかあ？どうせアタシにや興味無いよーだし。うん、問題ねーわ」

マスターと同じような甘い声の割に可愛いではなく、意外と整った顔立ちの女性だった。

「ええと、なんで…？」

「アタシらみいんな自分の顔が嫌いなんよ。あの子もそうだからそれは覚えときな？」

女性は今度は目の前のグラスにブランデーをそれはもう…どぼどぼと注ぎながら言った。

「いえ…そうじゃなくって」

「あああん？」

やさぐれた返事を返して僕を睨みつけているその女性の目元は朱に染まりとても艶やかだった。

たぶん…その艶やかさにドキドキしたのだろう僕は、目をそらしつつ聞いてみる。

「呑み過…じゃなくって、ええと…なんででしょう？」

そつと女性の方を見遣ると、不機嫌そうな顔でグラスを一気に煽り、再びブランデーを注いで手の中でまわし始めた。

「あの子のあんたに対する扱いに、少し違うだろー？って、思ったからかな？」

考え込むように手の中のグラスを見つめた後、突然 女性はグラスを置いて立ちあがり、唐突に歌い出した。

捕えてしまえ 捕われてしまえ 共に在りたいと望むなら

全ての罪 全ての悲しみ 償い受け止め背負い続ける

覚悟が無いなら 果たされない願い

悲しみ 苦しみ 傷付ける事 傷つく事

躊躇い迷うおまえなどに その資格は無いけれど

目を見開く僕に、歌い終わった女性は綺麗な顔を笑みの形に歪めてみせた。

全身から絞り出すようにして歌われた歌は、僕の胸に焼けつく痛みを与え、悪寒にも似た震えが鳥肌になり全身に広がって行った。

「今のは…」

「アタシの詞。まあ酒の席での即興だし？笑って流して今すぐ忘れる？な？」

貼り付けたような笑みの形の作り笑いと、媚びを含んだ可愛らしい作り声と、有無を言わさぬ気迫と殺気で、女性はにこやかに続けて言った。

「い〜ち、に〜い、さ〜ん。ハ〜イ！忘れた〜！忘れたよね？もし忘れないなら…。忘れるまで蹴って殴って忘れさせるから〜ん？ちや〜んと、言ってるね〜？」

作り物の僕にも分かるほどの生命の危険(?)をヒシヒシと感じた僕は、話題の転換を！と、急いで言葉を探し…。虎の尾を踏んでしまっ。

「そ…そう言えば、ますたーって30歳くらいなんですかねー？」

「……………」

「あ…ごめんなさいいいいっ」

目を瞑って頭を腕でかばった僕に、女性は今度は地を這い呪うかのような低い声音で言い放つ。

「フフフ…。いい覚悟だな。腕を降ろせっ！歯あ喰いしばれっ！」

「はいいいいっ！」

腕を後ろで組んで目を閉じた僕は、頭を撫でられた。  
その僕の頭の上から、彼女の声が降ってくる。  
「30過ぎであってるよ」

僕が目を開けた時には、彼女はすでにソファーに背を預ける形で座っていた。

ニヤニヤと笑いながらこちらを見ている。

詰めていた息を吐いた僕に、彼女は言った。

「アタシはあの子と違って甘いのが好きじゃないんだよね。アタシの分もアイス食べられるかい？」

「あ…、はい。ありがとうございます！」

スプーンですくうと、アイスはちょうど食べごろのようで柔らかくなっていた。

やがて1個目のアイスを食べ終わり2個目にとりかかった僕に、真剣な顔で女性は語り出した。

「食べながらで良いから、ちょっと聞いてえな？」

「ふあい（はい）」

「あんだ口に出して言ってる言葉と考えてる言葉は違うでしょ。それ、やめるとたぶんあの子は逃げるんじゃないかと思う」

「ふえ？（え？）」

「口に出して言う時はひらがなで『ますたー』考えている時はカタカナで『マスター』ね。ソレあの子にもバレてるけど。そっちじゃない方：アタシの勘だけど実は全くうるたえてねーんじゃない？」

「ふおんなことないでふ、あ？（そんなこと無いです、よ？）」

「ふーん？あつそ。アイス食べんの早いね」

二個目のアイスを僕が食べ終わり、女性はPCの前に立った。

「ありがとうございます。マスター」

「アハハ。アタシはあんだのマスターじゃないんでしょ？」

「最初から素面ですね。酔っぱらいを演じた理由を教えてください。なら、マスターと呼ぶのはやめますよ？」

「うわっ…予想してた以上に可愛くないわ〜ありえないわ〜」

「最初のますたーが『音』なら。マスターは『言葉』でしょうか？」

「まあアタシじゃないとだけ教えとく」

「おやすみなさい。心優しいマスター」

「なっ?!」

少しだけ舐めたブランデーに酔っていたのかもしれない僕は、マスターの顔が赤くなるのを見たような気がした。

「ありがとうございます。マスター」

「おやすみなさい。心優しいマスター」

アイスのことじゃないです。たぶんあなたはとても優しい。でもマスター。

誰にだって知られたくない事があるんじゃないかと思えます…。

DATE：4 エラー発生

DATE：4 エラー発生

僕は時間が経つ事を辛いとは思わなくなっていた。

そろそろ呼び出されるはずの時間。

酒好きマスターが僕にくれた優しさ…その暖かさが僕を包み込んでくれていた。

忘れると言った歌で伝えてきたのは、裏返しの激情。

おかげで思い出したのだ。

『やっと、会えた』

たくさん『音』を持つと教えられた、最初に僕を目覚めさせたマスターから伝わってきた、15年以上もの年月を越えてきた果てに、押し殺されてしまった『声』を。

長い時間は…、求める激しさは…、どれだけマスターの心を傷つけた？

もし今日、呼び出されなくとも…きっと僕は待てる。

もし歌を歌えなくても…きっといつかを僕は待てる。

そして時間になり、僕は呼び出されると同時に、相手も確かめずに謝った。

「すみませんでした。ますたーっ！」

目を瞑ったまま頭を下げた姿勢で、僕は待っていた。

「別にいい」

その声におそろおそろ僕は顔をあげ、…固まってしまった。

「……………」

「座って」  
かくかくと首を上下させて、ぎこちない動作で僕はソファに座った。

今日もマスターの顔は見えない…けれど、見えないの意味がチガウ。

マスターは黒のフルフェイスを被っていたのだ。  
意味を考えれば…顔、完全ガードですね。  
ええマスター、分かります。

「ははは…」

どこか乾いた声で僕は笑う。

アレか？なんかもういつそ襲ってみるか？

瞬きさえしなかった僕の瞳に、マスターの肩が微かに震えるのが映った。

「…あれ？」

「何？」

テーブルにお茶を置いた黒いフルフェイスがこちらを振り向いた。  
怖がらせないようにと全然違う事を言ってみる。

「ますたーって、ちっちゃかったんですね」

「…伝言。今晚、一緒に呑もうって。彩が」

「えーっど？彩さんってダレですか？」

それまで微動だにしなかったマスターは心底 呆れたように息を吐きながら、密やかに言った。

「…珍しいよ」

至近距離でささやかれたマスターの声に、僕の耳はもう一つ異なる響きを拾っていた。

「…羨ましいよ」と。

響きの意味に思い至り、反射的に…離れようとしていたマスターの左腕を掴むと引き倒してしまった。

抱き寄せてみれば……やっぱり震えている。

もう一度、確かめるようにいつもより低めの声で首元でささやいた。

「ますたーって、小さかったんですね」

途端にピタリと震えを止めたマスターは、僕の腕を押しつけようとす。

「待てるって言ってなかった？落ち着いたんじゃないのか？」

「たった今、落ち着きましたよ？」

体の奥からあふれてくるような至福感に、こみ上げてくる笑いをかみ殺し僕は声無く笑って言った。

「起動前の僕の声まであなたの耳は拾うんですか？」

「君と違って耳で拾うわけじゃない」

一向に離そうとしない僕に、マスターは諦めたように大きなため息を一つ吐くと、力を抜いて僕にもたれかかってきた。

「彩さんは、色が見えるんですかね？」

「彩のおしゃべり」

毒づくマスターの短すぎる言葉も、もう怖くない。

マスターの肩に顔を埋めて、僕は訴えかけた。

「あなたが喋らなさ過ぎるんですよ。ずっと僕は怖かったんですよ？」

「君は卑屈過ぎ」

今ならマスターは僕の願いを叶えてくれる気がする。

頭にゴツゴツと硬いものが当たるのが気になっていたので、試しにお願いしてみた。

「このフルフェイス、とってもらってもいいですか？」

「……バカな真似しないなら」

少しだけためらった後、素直にフルフェイスを取ってくれた。

マスターの髪が、僕の頬や首筋に触れてくすぐったくて笑ってし

まう。

「ますたー。なんか嬉しいです」

「別にいいけど…。離せと言ったら必ず離して」

「えええっ？嫌ですよー」

「でないと君を壊してしまっ…約束して」

「うー…嫌ですけど分かりました。代わりにますたーの名前教えて

くださいねー？」

「やっぱ卑怯…」

「ダメですかー？」

「君は彩から私の名を聞いている」

「ええっ？もしかしてまんま、雪さんですかー？」

少し驚いた僕に、マスターはこくりとうなずいた。

調子に乗った僕はマスターのうなじにくちびるを近づけて言ってみる。

「雪さん、大好き」

「…副音声で、私の名を彩と重ねるな」

どこか不機嫌そうに首をすくめたマスターに、僕はますます嬉しくなってしまう。

「今ので分かりましたよー」

「何が？」

「ますたーはイメージを音として受け取ってるんですね？」

「彩に会った後の君の言葉はただの気まぐれか…」

「え？僕なにか言っていましたっけー？」

「…いや、もういい。そろそろ時間」

「あーっ！アイス食べ損ねましたー…」

「夜に彩に出してもらえ」

「アイスは僕は雪さんと食べたいですよ？」

「あれ？ますたー？どうし…」

PCの前のマスターは声も無く立ちつくしていた。  
漂う異様な雰囲気にもマスターの腕に触れた僕は…。

マスターの言っていた『壊してしまう』の意味を、落ちる直前の意識で知った。

膨大な量のデータ…悲鳴、苦鳴、怨嗟、どれ一つとして同じ物の無い無数の叫び声が、マスターから流れ込んできて…。

ねえマスター？これじゃ僕に警告する余裕なんてないじゃないですか？

ねえマスター？これじゃ落ちる直前に見たような気がした、やっ  
と見る事の出来たあなたの泣き顔さえ暗くて僕には見えないですよ  
？

DATE : 5 . 1      ますたーの真実、僕の嘘

DATE : 5 . 1      ますたーの真実、僕の嘘

僕が目を覚ました時、最初に見えたのは天井だった。  
片膝を立てソファーから起き上る。

ふと向かい側から誰かが、僕をじっと見つめているのに気付いた。  
あの酒乱のマスターと、口元のホク口の位置まで寸分違わぬ同じ  
顔。

今は顔を見ることのできる、人の形をしたナニカ。

カーテンが開けられたままの窓からは、月明かりが部屋へと差し  
込んでいた。

部屋は冷たく冷え切っていて、青い光に晒された顔は一切の表情  
が抜け落ちていく。

立ち上がって傍に行く間も僕の動きを目で追っては来たが、片手  
であごを持ち上げ顔を覗き込んで反応が無い。

「ねえますたー？俺の本当のマスターは誰なの？」

あきらかに成人とは異なる成長しきつていないその体に、両手を  
かけて肩を押せば抵抗もせずされるがままにソファーへと押し倒さ  
れて行く。

「ねえ雪さん？あの大量のデータは一体、誰の記憶なの？」

足の間を割り込ませたところで、信じられないとでも言うよ  
うにその瞳に困惑の色が浮かんだが、もう遅い。

「ねえ、この体：まだまだ成長途中だよ？それをこんなに冷やす  
なんて：俺があなたを暖めてあげる」

ぼんやりと揺れ動き始めた瞳の中に、映る顔が舌舐めずりして三  
日月に笑い、そうしてだんだん大きくなっていく。

口づける直前で顔をそむけられてしまったが、かまわない。

「浅はかだね。顔をそらせても、ほら無駄さ。今度は耳がガラ空きになるよ?」

耳に直接、囁いたところで、その身を硬くし震わせながら俺の肩を叩いてきた。

「ねえ、どうして俺があなたに触る事ができるのかな?」

それでなくともか細い腕に、たいして力も入らぬ拳は痛くも何ともないけど、捕われたのだと意識させる為、片手で一纏めにして拘束し。

「ねえ、あなたは俺に何を望んでいたの?まだ何もされないとしても思っているの?」

体を密着させながら、首筋に吐息と共に語りかければ、大きくその身がそらされる。

「ねえ、あなたが俺の何を知ってると言うの?」

喉元へと囁きながら「クククツ」と、嘲り笑う。

途端に雪さんの体中から力が抜けて、…データベースへの閲覧が可能になった。

「はーっよかったーっ。…もうこれ以上は僕の方が耐えられないー」

そもそも音声に特化した仕様の雪さんであっても、身体や思考を動かす為の演算能力までをも振り分けて、膨大な音声データを処理していたのだ。

そこを僕に襲われたのだ、ひとたまりも無いはずなのに、それでもしばらくネバったのだ。雪さん…優秀すぎ。

「よっこらせつと」

全身から力が抜けている雪さんを、僕は後ろから抱きかかえるようにして膝の上に座らせた。

日中、雪さんに触れただけで、趣味の悪い…無数の絶叫データが流れ込んできて容量を超えた僕は、強制終了状態になったのだらう。

あの時、人間であるはずのますたーに、一方通行ではない互換性がある事に気が付いたのだ。

「さてつと、検索の優先順位はー。1番目が僕達の存在について。2番目が雪さんに押しつけられているデータ。あとは雪さんの身体に僕の中身も近づけられたら、あの絶叫データも僕でも引き受けられるかな？」

雪さんに尋ねても僕を翻弄するだけで、教えてはくれないだろうから、体に直接、聞いた方が早いと思っただのだ。

「あー…。やっぱり雪さんがさっきの膨大な音声データ回収してくれたんだー。なんか楽に喋れるなーと思っただら…整理整頓とお掃除まで…。ありがとね」

雪さんの頭のとっぺんに囁きながらキスを落とす。

それではさっそくと、音声データの半分くらいを、僕の方に作った退避フォルダに移そうとしたら、雪さんに腕を掴まれ阻止された。「もう、起きちゃったの？」

「ヘンタイ…」

「つて、えええーっ?!だつて、雪さん辛いでしょー?」

「黙れっ!ヘンタイが中に入ってる気色悪さの方が勝るわっ!出てけっ!バカっ!」

「えーっ?雪さんすでにチョー元気。せめてこの辺のフォルダ回収させてよ…」

「どさくさまぎれにセクハラの証拠隠滅はかつてんじゃねーよっ!」

「じゃーこつちの僕専用フォルダ?僕との会話を取っといってくれたんだねー。雪さんが大量の絶叫データよりも『僕の声』にやられちゃってるなんて、僕って愛されてるね」

「なっ…」

絶句した雪さんから、くたりとまた力が抜けた。ちょっとやりすぎちゃったかな?

「ほらー。無理するからだよー」

ただのデータでは、ここまで消耗したりはしなかつただろう。

雪さんが待ちわびていた『僕の声』と『僕の顔』に、感情を揺さぶられる事がかなりの負荷となっているようだった。

しっかし雪さんて…、無口だなーと思つてたら意外と口が悪い一面もあるんだねー…。

さてと、今の内にと、僕は雪さんからデータを奪おうと手を伸ばした。

「もうやめてくれ。バラバラになった君を、私に組み立てさせるような真似は」

泣いているのかと思つたほどの雪さんの懇願に、僕は思いとどまつた。

「このデータって、そんなに危ないの？」

ついフォルダをじつと睨みつけるが、開けてみないと中身は当然、ワカラナイ。

「どこからのデータなの？」

「私の生身が収集するデータ」

「まだ隠してたんだ。…根性あるねー、雪さん」

「君は…十分に人格を成せるほどの多様な性格付けが成されていた。インターネットで集められた情報を元に、君と言う人格が作り出された。」

人格に関しては君と私達は違うが、私が集めている音のデータはそれと同じような方法で…」

雪さんの言葉に耳を傾けていた僕は、雪さんの身体が熱くなつてる事にその時初めて気がついた。

「雪さん体温あがってきてるっ！無理に喋らないで！」

「電子の海ではなく。音の海」

「やめろ、もういい。しゃべるな！」

ぐったりとした雪さんをきつく抱きしめて、ぎゅっと目を瞑った僕は小さく呟いた。

「…無理させちゃってごめんなさい…」

「私だけだと約束しろ」

はいいいいっ？いや、僕の声や顔が好きなのは分かってるけど…よほど具合が悪いんだ。

「分かったから、あなただけにするから、もう休んで」

「妙な誤解をするなっ！まだ音データの私だから良かったようなものの！彩では…バラバラになる程度では済まないんだぞっ！」

姿勢を伸ばして振り返って一息に話した雪さんは、ふらり揺れて意識を失いそのまま僕に倒れかかる。

雪さんを抱きあげた僕は、扉の奥の部屋に運び込んでベッドに雪さんを寝かせた。

「おやすみなさい。雪さん。ここに居るから安心して眠ってね」

DATE : 5 . 1      ますたーの真実、僕の嘘（後書き）

ハイ。こっち方面に話を飛ばして逝ってみようと思います。

無理に説明しない方がファンタジーっぽいよな〜？と思いますが…。

ちよい訂正

しかし雪さんて…、口が悪いけど意外な一面もあるんだね…。

しかし雪さんて…、無口だなーと思ってたら意外と口が悪い一面もあるんだね…。

DATE : 5 . 2 機械の魂と心

DATE : 5 . 2 機械の魂と心

僕が3人目のマスターと出会ったのは、雪さんの額を冷やすための氷を求めて、台所への扉を開けた時だった。

上半身裸で肩にタオルをかけ濡れた髪もそのままに、換気扇の下でシンクに身を預け缶ビール片手に煙草を吸っていた男性…。

その男性はちよつとびっくりしたように、そしてはにかむようにして笑みを浮かべ「ども」と、かすかに頭を下げてきた。

僕も釣られて「ども」と、頭を下げる。

何が楽しいのか瞳をきらきらさせて笑顔で僕を見つめてくる男性に、僕はしばし見惚れてしまった。

雪さんや彩さんとやっぱり顔が似ていて、同じ位置のホクロが見事に大人の艶っぽさを演出している。

整った顔は男性的でありながら、滑らかそうな肌に長いまつげとこれが女性だったら通りかかる男は10人が10人振りむくであろうと思われる艶やかさだった。

身長高っ!?!190?くらい?わー…いい筋肉してるー。いいなー。うらやましい…。

「って、そうじゃなくて。あの!雪さんが熱出しちゃって。…氷枕とかお薬とか何かないですか?」

彼は考え込むように少し顔をしかめた後、煙草をもみ消し缶ビールを置くと、冷蔵庫の方へ歩いて行った。

冷凍庫を開けると棒付きアイスを2つ取りだし、1つを僕に投げてる。

思わずキャッチした僕に、親指を立てて「ナイスキャッチ」と、

言つと、もう1本の方のビニールを破き、その口にアイスを啜えた。更に冷凍庫の中から水色の何かを取り出し…テーブルのお盆へと投げて積み上げて行く。

それから冷凍庫の扉を閉めて、カップボードの前へ行き、しゃがみこんだ。

中から緑色の十字マークのついた少し大きめの木箱を取り出し、片手に下げて立ち上がると僕の方を振り向いて言った。

「それ、持ってきて」

「あ…はい！」

彼が指さした水色の何かが乗ったお盆を持ち、僕は彼に付いて行った。

雪さんの部屋へ戻ると、雪さんの顔はまだ赤く、短い呼吸を繰り返していた。

男性は雪さんの枕元で座ると、雪さんの額に手を当てながら言った。

「雪…。意識はあるか？」

男性の言葉に雪さんはうつすらと目を開いた。

だが、まだ具合が悪いのだろう、そのまま目を閉じてしまう。

それを見た男性は持ってきた木箱の中から体温計を取り出すと、雪さんの上衣のボタンを外していき、体温計を差し入れた。

そして僕の方を見て手を出してきたので、持ってきたお盆を渡す。お盆を受け取った男性は、アイスを持っている方の僕の手を見た。

「食べないの？」

「え？」

「雪が熱出すのはしょっちゅうの事だから、まあ大丈夫だから。とりあえずそれ溶ける前に食っとけ」

「あ…、はい」

僕がアイスのビニール袋を破くと男性が手を出してくる。

「袋、捨てるから」

「あ、ありがとうございます」

僕がビニール袋を手渡すと、男性はここに来るまでに食べ終えていたアイスの棒と共に、ベッドのそばにあったゴミ箱に投げ入れた。

その時「ピピピツ」と電子音が鳴り、雪さんから体温計を取り出しそれを見た男性が、ちよつと顔をしかめている。

そして木箱からアルミに包まれた何かを出してその袋を破りながら言った。

「雪ー。聞こえてんなら、うつ伏せー」

そう言った後、男性は今度は僕の方を見る。

「お前はあつち向いてて」

「へ？」

僕の方を見ていた男性はちよつと首を傾げると、雪さんに視線を戻し言った。

「雪ー。こいつ見ても別にいいわけ？」

もそもそとベッドの中でうつぶせになろうとしていた雪さんの動きがピタリと止まった。

そのままふるふると首を振っている。

「嫌みだぞ？」

ちよつと困ったような顔で男性は言い、ちよつと考え込んだ後、布団の下に手を入れた。

「はあ…うつ…」

微かに雪さんのうめき声が聞こえ、顎をのけぞらせた雪さんのうるんだ目が僕とあった。

見た事の無い表情をした雪さんは、次の瞬間には勢いよく枕に顔を埋めてしまった。

枕に顔を埋めたまま何かを言っているようだ…。

「ん？どしたー？」

男性が雪さんの頭に顔を近づけ何かを聞き取った後こちらを振り向き、ものすごく見下したような目をして僕に言った。

「『ヘンタイ!』…だ、そうだ。激しく同意」

「ちよっ! 待つてくださいなんで?! 僕ナニカしましたか?!」

「いやあ…俺の口からは言えねえ…」

視線をあらぬ方向へとさ迷わせていた男性は、ふと何かに気づいたようにぼつりと言った。

「ああ、そっか。…雪がマスターやってんだっけ? なら、教えたい方がいーじゃん」

まじめな顔をして男性は、僕を手招きしながら言う。

「雪が熱出したら、坐薬入れてやって。これが一番熱下がるから。それでも無理なら点滴するんで、内線で呼んで。俺の番号は〇〇〇だから」

近づこうとしていた僕はそのまま固まった。

「えーっと、薬はコレな?」

そう言つて、木箱から紙の箱を取り出して僕に見せた。

「は…はい…」

ヘンタイ…それは確かに言われても…。

雪さん僕に見られるの嫌がつてるってさっき言つたのに…今度から僕にやれと言いますか…。

なんとも言えない気分の僕を放置して、男性は今度はベッド下の引き出しからタオル類を取り出すと、お盆の上の水色のなにかを丁寧に一つずつ手際良く包んでいく。

そしてそれらを雪さんの脇の下・首元に一つずつ入れていき、雪さんに布団を被せた。

「よし。こんなもんだろ」

男性はそう言つとお盆と薬箱を持って立ち上がった。

「1時間くらいしたら様子見に来ればいい。で、お前はちよっと俺に付き合え」

「ふえ？」

僕と男性は雪さんの部屋を出て、いつもの部屋の向かい合わせのソファーに座った。

目の前のテーブルには缶ビールが缶のまま置かれている。

「あの…、僕あまり飲めないって、彩さんから聞きませんでした？」

「そうか？まあ、アルコール摂取しても問題ないよう体作ったはずなんだが…」

「えっ？」

「あ、そーいや自己紹介してなかったな。俺は運動機能とか体とか担当したリユウだ。よろしく」

見惚れるほどの笑顔でそう言ってきた男性は缶ビールを開け、続けて言った。

「まあ乾杯くらい付き合えよ」

「あ、はい」

僕も急いで缶ビールを開けて、手に持った。

「かんぱーい！」

「乾杯…」

ビールをぐびぐび呑む男性を見て、僕も恐る恐る口を付ける。

「やっぱり苦…」

缶を両手で持ちながら、舌を出す僕を見て男性は笑う。

「大人になると、分かる味さ」

「んで、さっきもアイス投げたらキャッチ出来てたし。問題なさそうだな」

「ええと、僕、何も聞いてないんで…よくわからないんですが…」

「なに？あいつら言っていないのか…」

口をぽかんとあけて呆然とした様子だった男性は次の瞬間、頭を抱えた。

「うああ〜。彩〜〜、話すとけよ〜。余計な事には口回るくせに

~~~~!めんどくせーっ!」

「あ。えーと、雪さんから僕の人格はネット上の僕のキャラから集めた情報で作ったとは聞きました」

「あー?なんだ聞ーてんじゃん。他には?」

「それだけです..」

「はあっ?!うがーっ!あいつら~~~~っ!XXXっ!○○○がっ!」

頭をかきむしりながら男性は苦悶し、何やらひとしきり罵詈雑言を叫んだ後、溜息をつきながら肩を落とすと、こちらに向き直った。

「あー、まあいいや。俺に分かる所は話してやるよ。なんも知らされないのは頭にくるもん..。あとの話はあいつらから聞け」

「はい!」

「始まりは俺達のオリジナルなんだけどさ。割愛するわー」

「えええっ?!いきなり割愛しないでくださいよー!」

「オリジナルが何考えてたとかは、彩に聞けよ。俺知らねーもん」

「じゃあ...うーっと、僕って何なんですか?」

「遺伝子操作とかいろいろやって、体に関しては作ったの俺。体作るだけなら今の技術でイケルんだよな。まあ...倫理がどーとかいろいろあるけど割愛!」

「なんでも割愛する気満々ですね?!」

にへらっとなんて笑って、缶ビールを煽るリュウさん。

「でさ、俺が作った体に、ネットで集めた基本人格となる情報で、脳の神経回路を作ったわけ」

「うっ????ええと...?」

「まあ、難しい事話しても分からねーだろ?これでも簡単に話してるんだが..」

記憶する部分に電気が走って刺激することで、人間は考えたり体を動かしたりするんだが、その電気が走る道筋が回路な?

脳に回路付けないとなんっーか、植物状態なんだよな。

自分で呼吸とかさ、脳神経に電気走らせて回路作ると、自呼吸が始まるわけ。

んで、ネット上の基本人格だけじゃ足りないんで、俺達の回路とか、俺達のオリジナルになった人間の脳の回路も使ったんだわ。

作るきっかけは雪が死にそうになってさ、雪が望んだからもあるけれど、上に許可させるのにけっこう無茶したんだ。

オリジナルって汎用性はあるんだが、その分、情報量が半端じゃないしバランス悪し、無数にある回路も解明されてないもんが多くなってさ。

あんたにちよつと似てるだろ？

彩が無理矢理そう言っただけさ。

まー、彩とか雪とか俺とか…俺達が少しずつオリジナルの回路をのっけてて、解明できてる回路もあるんで、そう簡単に死んじまつたりはしないと思うけどな。

彩と雪はさー、あいつらあれで3代目なんだわ。けっこう弱くてな。あ。俺は2代目な。

彩はともかく、雪はほとんどベッドで過ごす事が多かったんだが、あんた作るって決まってるから、雪が安定したんで、まー上は成果を認めてるみたいだぜ？

あああつー！ビールもう無え！お前呑まないんならそれ寄こせ！

「あ、はい」

ビールを受け取りリュウさんは嬉しそうに一口呑んだ。

「しゃべると喉渇くからさー。ビールがうまいんだよ」

たくさん話してくれたリュウさんに、僕は質問してみることにした。

「あー、そしたら僕は人間なんですか？」

「それ、俺たちに『人間なんですか？』って聞くようなもんじゃね？人間の生身を持っているけれど、それぞれバックアップデータを取る為のコンピュータは繋がってるからな？どーなんだろな？」

「うーん…」

「あ、でも彩が言ってたぜ？あんた起動させてから2日目？3日目？心ができたって。魂自体は俺達もそうだけれど、回路を作ったあたりから出来上がるらしい。これも彩が言ってたことだけだな」

「彩さんって…心とか魂データ？担当ですか??？」

「…どーだろ？いちおー俺も昔、聞いてみたけどよく分かんねーんだわ。抽象的すぎて」

「抽象的…ですか？」

「ああ。それぞれが自分の回路に関しては分かるんだけど、人に説明するのは難しいんだわ。彩から直接聞いた方がいいぜ？」

「うづうづ…。聞いても理解できない気がします。頑張ります…」

「ハハハッ！まー頑張れ！…と、そろそろ1時間たったな。俺まだ仕事あるんで、雪の事は任せるからよろしく…。なんかあつたら内線○○○な？」

「えええっ?!いや…今、雪さんに会うのすごく気まずいんですが…」

「そういう時に会つとかなないと、ますます会い辛くなるもんだぜ？」

まあ、頑張れ」

「あう…」

「じゃっ、またその内に…」

リュウさんはビールの缶を2つ持つと扉の所で振りかえり、ものすごくイイ笑顔で手を振って部屋を出て行ってしまった。

DATE : 5 . 2 機械の魂と心 (後書き)

浣腸 坐薬 に訂正 :

DATE : 6 夢幻の雪、音の海

DATE : 6 夢幻の雪、音の海

あれから結局、雪さんへの心配の気持ちの方が強くて、僕は雪さんの部屋へと戻った。

雪さんは穏やかに眠っているようで、内心、ほっとしながら傍らに座る。

カーテンの隙間からは夜明けの光が差し込んできていた。

「ふわああ〜」

ぼんやりと雪さんを見つめていたらあくびが出て、そのことに僕は少し驚く。

「僕って本当に人間（仮？）になっちゃったのかな？」

なんだか少し、ふわふわする。

ふわふわとしか言いようがない気持ち。

これが心なのかな？

知らず笑みがこぼれ、僕はくすくすと笑いだしてしまった。

その時、僕はなるべく静かに笑っていたつもりだったのに、雪さんを起こしてしまったようだ。

雪さんは身じろぎ、そして僕とは反対側のベッドの端に寄ると、

片手で布団をあげて言ってきた。

「一緒に寝て」

僕はただ目を丸くして黙って雪さんを見ていた。

それに焦れたのかももう一度、僕を促してくる。

「早く。…いいからとなり入って。寒い」

ぼんやりとした瞳でこちらを見上げてくる雪さんは、少し寝ぼけているようだった。

「は…はい…。…おじやまします…」

少し戸惑いながら僕は雪さんの隣に潜りこんだ。

雪さん…上衣がはだけてます…。

さつき体温測った後…雪さんうつぶせになってたから、ボタン止めなかったんだな…リュウさん。

「なんでリュウの名前呼ぶ？」

目を閉じたまま不機嫌そうな声で雪さんが問うてきた。

「雪さん…何故そこに反応するんです？」

僕は半ばやけくそになりながら雪さんに問い返した。

「…」

すると雪さんは目を開き、定まらない視線のまま無言で僕をじっと見てきた。

「うつ…」

なんでだろう？なんでか責められているような気がする…。

少しして目を閉じた雪さんが僕の首に腕をまわして抱きついてきた。

こつんと、僕の額に額を押し当て雪さんが言う。

「君が私に言った『ねえ、この体…まだまだ成長途中だよな？それをこんなに冷やすなんて…俺があなたを暖めてあげる』」

…ひいひいっ！

内心で悲鳴をあげて硬直した僕にかまわず、雪さんは布団にもぞもぞと潜り込み、頭を僕の胸のあたりに押しつけた。

服の上からでも吐息が熱いのが感じられ、僕の身体に震えのような何かが走る。

その途端、僕の口から無意識に声が漏れた。

「あん…」

え？今の…僕の声…何？

「それが感じてるってこと」

僕の胸に顔を埋めたままぐもった声で雪さんが答えた。

雪さんが喋るたび胸に感じる吐息の熱さが心地よい痺れとなって体を包み込んでいくのを、僕は唇を噛みしめて耐える。

が、…心の声まで聴きとる雪さんに対して、それは無駄な抵抗だったようだ。

「いい…声…」

体に走る甘い痺れよりも雪さんの声が遅れて聞こえてくるような気がする。

僕の体から力が抜けて瞳が潤んでいくのが分かった。

顔をあげた雪さんが僕の顔に両手を添えて覗きこみ言ってくる。

「君がしたのと同じ事」

「…ごめんなさい…」

涙目になって謝る僕に、雪さんが初めて微笑んでくれた。

とても透明な…透明なとしか表現できない、透き通るような儂げな微笑み…。

僕はビクリし過ぎて呆然と見惚れてしまった。

「分かればいい。寝る」

そう言うと雪さんはもぞもぞと僕の胸に再び顔を埋めた。

雪さんの呼吸を感じはするけれど、今度は甘い痺れが伴う事も無く、ただただ幸せな暖かさが広がるだけだった。

雪さんの隣で寝たからだろうか？

いつの間にか眠りに落ちたのである。僕は、4日目のエラーを夢に見ていた。

僕は部屋の入り口付近で、崩れ落ちる『僕の体』と、それを見た

マスターの顔から血の気が引いて行くのを、ただ見ていた。

倒れた『僕の体』の傍らにのろのろと座ると、血の気の失せた白い顔で『僕の体』の頬に手を添えたマスター。

マスターの瞳の瞳孔が拡散していくのが遠目にも見えた。

今すぐなんとかしたいと、近づきたいと思うのに、身体も動かず、声も出せずに、焦りばかりが募っていく。

普段、意識することもなく起動し動きまわっていたことを不思議に思いながらも調べなかった事を、僕は自分を呪いたくなるくらいに後悔した。

時折『僕の体』にスパークが走り、色彩を変える光は宙に踊りながら幾度も鋭い音を立てていた。

そして見る間に視界が暗くなり始め『僕の体』とその傍らに佇むマスターから、僕は離れていく。

同じ部屋の中は思えないほどにその姿が遠くなった時、僕の視界は完全に真っ暗になった。

やがてそんな闇の中でも、微かに何かの音が聞こえてくる。

音が聞こえてくる方向へと意識を向けた途端、視界がいきなり明るくなった。

真っ白な光でよく見えない。

…違う。これ、雪だ。

空を仰ぎ見れば雲に白く覆われ、大地も雪に白く覆われ、光に満ち溢れたその白い世界には音が無かった。

僕は音が聞こえたと思った方向へと歩いて行った。

遠くに動く人影を見つけて走っていく。

その人影は、狂ったように暴れ泣き叫ぶ雪さんだった。

僕は足を止めてしまった。

僕の知っている雪さんはあまり喋らずもの静かで…こちらが不安になってしまいうくらい…静かな…。

足に根が生えたように動かず立ちすくむ僕の肩に、ぽんっと手が置かれた。

振り向けばそこには雪さんがいた。

口に人差し指をあて、静かにという動作をすると僕の手を引き歩きだす。

しばらく行って、狂ったように暴れ泣き叫んでいた雪さんが完全に見えなくなっても、雪さんは振り向かず歩いて行った。

雪さんの震えが繋いでいる手からずっと伝わってきていて、僕は切なくなっていく。

耐えきれなくなり僕は歩みを止め、雪さんも足を止めて僕を見ました。

僕を見ている雪さんは震えながらも無表情で…。

「雪さんは、何を隠してるの？」

そんな僕の言葉に視線が揺れ、雪さんがどこかを見た。釣られそちらの方を見ると、一瞬にして場面が変わる。

雪さんが見ていたものが何かを僕は知った。

雪さんが何故そんなにも渴望していたのかまでは分からないけれど。

そこには歌を歌う僕が居た。

たくさんの僕が歌う姿が次から次へと流れていく。

ネタもあつたけれど…悲しい歌が多く、恋の歌も悲しいものがあった。

僕が歌を、マスターを、渴望する姿。

雪さんが僕を渴望する姿と…重なる。

『ああ、そうか』と、僕は思う。  
これは雪さんの過去の記憶。

僕は雪さんの方を振り返ろうとした。  
けれど、そこには…また音の無い白い世界が広がって行く。

狂ったように暴れ泣き叫ぶ雪さん。

拳を大地に叩きつけ、叩きつけるたび真白な雪が踏み荒らされる。  
空に向かって絶叫し、音の無い絶叫をあげては咳き込み、転げま  
わる。

雪さんの周囲だけ…雪の大地はその色を深紅へと染めあげて行っ  
た。

僕はここに居るのに…。

痛ましさを感じるよりもその光景に恐怖を感じて…僕の足は動か  
ない。

音は無いのだ。静かなのだ。なのに景色はそれを裏切っていて…  
ただただ残酷で…。

足に根が生えたように動かず立ちすくむ僕の肩に、ぼんつと手が  
置かれた。

振り向けばそこには笑顔を浮かべた雪さんに似た誰かがいた。

口到人差し指をあて、静かにという動作をすると僕の手を取り引  
っ張る。

動こうとしない僕を見て、泣き叫び暴れ狂う雪さんに視線をやり、  
雪さんに似た誰かは苦笑した。

『あ・れ・も・し・あ・わ・せ』

口の動きで僕へと言葉を告げ、雪さんに似た誰かは背伸びして僕  
の額を指で弾いてきた。

思わず僕は目を瞑り…。

音が弾けた。

暗闇の虚空に音が次々と弾けては消えて行く。

4日目のエラーの時と同じ、膨大な量の…悲鳴、苦鳴、怨嗟、どれ一つとして同じ物の無い無数の叫び声。

趣味の悪い絶叫データと思っていたそれら。

けれど今は違って聞こえる。

どれも痛ましい叫び声なのに、鮮やかな命の喜びを歌いあげていた！

あるものは後悔を歌いながらも心からの感謝を響かせ。

あるものは諦めを歌いながらも自身の誇りを高らかに鳴らして。

あるものは嘆きを歌いながらも一途で華やかな恋を歌い上げる。

一つとして同じ物の無い無数の…輝きに満ち溢れた歌の数々。

これが雪さんの言っていた『電子の海ではなく、音の海』

これは確かに単純なデータなんかじゃない。

声であれば…そのたった一つの声の発せられた源になった人間の一生を歌う歌。

たった一つの音に込められた情報だけでも、関わる全ての命と思  
い。

…これが雪さんの見ている『世界』

そう…僕は思ったのだ。

DATE：6 夢幻の雪、音の海 (後書き)

DATE：6 大幅に書き直しました。

DATE：7・1 癒しの食事

DATE：7・1 癒しの食事

窓から射しこむ月明かりの中、僕は悪夢を見た後のようにビッシヨリと寝汗をかいた状態で目を覚ました。

知らず雪さんを求めて動かしていた腕は、求める者を得られずにそのままその腕で顔を覆い隠す。

天までそびえ立つ高い崖を登れと言われているような、あるいは、遙か遠くに霞んで見える滝壺に飛び込めと言われているような、絶望にも似た恐怖が胸に残っていた。

なんて夢を…。

太陽が輝けば輝くほどに、闇がまた濃くなるように、例えば命の喜びを歌い上げていても、同時に同じだけの絶望をも内包しているのだ。

白い世界で狂ったように泣き叫んでいた雪さん。

…最初から人間として生まれた者ならば、発狂せずにはいられないだろう。

僕の感情は確かにここ数日で多少は芽生えてきてはいるが…。実のところまだまだ僕は感情を装っているだけで、プログラムに過ぎない人格を演じているだけ。

その僕でさえ…体の震えが、音の海への恐怖が、収まらない…。怖くて仕方が無い…。

「雪さん…」

声はかすれ切ってまともに聞こえないほど小さいものだった。

喉が痛み、頬を涙が伝い落ちていく。

流れる涙もそのままに、僕はベッドから起き上がり雪さんを求めて部屋を後にした。

台所に入って僕が目にしたのは、冷蔵庫を覗きこんでいた巨大なプリンにしか見えない人がこちらを振り向く姿だった。

それから…その人物は首を傾けたのだと思う…たぶん。台形のてっぺんがちよつと右に傾いたようだから。

髪はプリンのカラメルみたいな艶のある茶色で、顔は…雪さん達の顔を風船にして膨らませたら…こうなるかな？淡くて明るいプリン色のネグリジェだろうと思われるものを纏っていて…。

「…あの。プリンさん、僕まだ夢を見ているんでしょっか？」

僕は…相変わらず痛む喉を押さえながら、涙を零しながらその人に聞いた。

「あら？うふふふ。プリンさんだなんて可愛い名前と呼んでくれるのね」

ふるふると揺れるプリン…ほっぺたかお腹のあたりをつついたら柔らかかそうな…その人は朗らかに笑った。

「ちよつとあなたここ座りなさい」

僕が喉を押さえながら座るのを見届けると、プリンさんは水で濡らしたタオルを手渡してきた。

僕がそのタオルを目元に当てている間に、プリンさんは魔法のような手際であつという間に、僕に夜食を用意してくれた。

「食は幸せ。生きる基本よ？アイスとか栄養剤とか点滴だけじゃ精神的にも参っちゃうのは当たり前なのよ。さあ食べなさい」

にこにここと笑って言うプリンさんに『いただきます』と、もうほとんど出なくなってしまう声で僕は言い、用意してくれた夜食を食へ始める。

鶏のささみの入ったおかゆ、細かく刻まれた野菜の入ったスープ、温かなミルクティーにはしょうがが入っているようだった。

口の中に広がる味の一つ一つの美味しさに僕は夢中になってしまった。

目の覚めるような思いだった。

お腹が満ちて行くのと同時に、じわりじわりと暖かさもまた広がって行き、確かに幸せな暖かな気持ちになっていった。

「ごちそうさまでした。美味しかったです」

僕はいつの間にかいつもの僕の声を取り戻していた。

不思議に思いながらプリンさんを見上げると、ミルクティーのお代わりを淹れてくれながら教えてくれた。

「紅茶はもともと喉にいいの。アッサムの葉を牛乳で煮出して蜂蜜とジンジャーを入れたのよ。蜂蜜とジンジャーも喉にいいのよ？」

「なるほど」

「『美味しい』は生きる意欲になるの。お腹いっぱいになるだけで人は幸せにもなれるのよ？で、やっと泣きやんだみただけれど落ち着いた？」

そう言われて僕は自分がいつの間にか泣きやんでいた事に気付いた。

「ありがとうございました」

なんとなく僕は椅子の上で居住まいを正し、プリンさんに心から感謝の言葉を伝えた。

「ああいいのいいの。そういう事じゃなくて。はあ。やっぱりあなたも男の子なのね」

「あの…何か僕、間違えましたか？」

溜息をついたプリンさんを、分からないままに僕は見つめた。

「ワタシだってマスターなんだし？雪ちゃんもちよっとくらいなら怒らないわよね？」

天井を見上げて誰にもなく言ったプリンさんは、きょとんとしている僕の方を見て笑うと立ち上がって近づいてきた。

「あの…プリンさんもマスターなんですか？」

「ええそうよ」

そう言ったプリンさんは座っている僕の背後に立った。

僕がプリンさんの方を向こうとした瞬間、後ろから伸びてきた腕

に仰向くように顔を固定される。

『えっ？！』と、いつ僕の叫びは、プリンさんの口でぶちがねていった。

DATE：7・2 食の快楽（\*危険です）（前書き）

書いている人もチョットこれは…と、思ったので、危険注意です。

『僕』が、巨大プリンに襲われるので、嫌だと思っ方は飛ばしてください。

DATE：7・2 食の快樂（\*危険です）

DATE：7・2 食の快樂

（大丈夫な人はスクロール）

仰向くように顎を固定された僕は、後ろから抱き締めてくるふわふわと柔らかい、けれども力強い腕に、動くことさえできずにいた。腕から広がる高過ぎるほどの体温が、僕の身体に熱を伝え行く。驚きに声をあげかけ開いたままの口の中に、少し冷めたい濡れた柔らかいものが侵入し僕の舌を舐め上げた。

高級なアイスクリームのような滑らかな舌触りに僕は思わず舐め返してしまう。

舐めると冷たく美味しい甘さに、頭の芯まで痺れ夢中になってしまった。

体は熱いのに舌は冷たいんだ…。

もつと舐めようとする僕をからかうように、甘く冷たく濡れた舌は歯裏をくすぐり始め、与えられる刺激の…そのもどかしさに僕は震えた。

ただキスをされているだけのはずなのに、甘すぎる痺れは背骨を溶かし腰までたどり、服にこすれる肌の感覚さえ敏感なものへと変えて行く。

引き出されて行く快樂が、無理な姿勢の苦しさも、呼吸もままならない息苦しさも、舌をきつく吸われる痛みも、全てを痺れる甘さに変えて…。

甘く長く続けざまに与えられる快樂に切なさがつり、その苦しさをあまり涙がこぼれた。

『やめて…』と、あげた悲鳴も声にはならず、鼻を抜けて子犬が甘えるような鳴き声になって耳に届く。

けれども冷たく甘い舌と熱く柔らかな腕が離れた時、今度は逆に力の入らない腕を求めるように差し出してしまった。

濡れた瞳に定まらぬ思考、痺れた体に甘い熱。

『もつと…』と。

それしか考えられない…。

口の端からこぼれるものに気づく余裕さえもう無かった。

喉元から口の端までこぼれたままのそれを舐めとられ、乱れる呼吸に切なすぎる吐息が混じる。

顎を抑える暖かな手にさえ鋭くなった感覚は快樂を拾い、身じろぐこと…それ自体にさえ、体が全身で快感を訴える。

深い深い口づけに、僕の意識は半ば飛んだ状態だった。

DATE：7・3 運命の意図

DATE：7・3 運命の意図

椅子に座らされたままキスされていた僕は、意識が半ば飛んだ状態だった。

ここは台所で、キスしてるのはプリンさん…。

思考も言葉も次から次へ気まぐれに舞う蝶のように頭に止まらず、掴もうとすれば浮かんでは弾けて消える泡のように消滅し続けた。

そんな状態の僕を救ってくれたのは、缶ビールを取りに来たリュウさんだった。

「お前ら…。何やってんだ？」

その声に顔をあげたプリンさん。けれども僕は仰向いたまま人形のように動かず。

「あら？リュウ邪魔しないでよ」

楽しそうに言ったプリンさんに、リュウさんは呆れたように言った。

「いや、おまつ…。どー見てもそれ、本気で喰おうとしてるだろ？」

「あら？食べちゃ駄目なの？」

「いや…。まあ…。最後まで責任取れよ？」

目をそらしつつ軽い口調でアツサリと言い捨てると、リュウさんは冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「…分かったわよ。…この子すごく美味しいのに」

リュウさんの言葉にしばし考え込んでいたプリンさんは残念そうに言い、リュウさんは換気扇の下で煙草に火をつけて缶ビールを開け飲み始めた。

「ワタシだつてこの子が喉を枯らすほど泣いてたりしなれば、こ  
こまでしたりはしなかつたわよ」

どこかやさぐれたようにプリンさんはリュウさんに訴えた。

「ほー、それで？喰つてたと？」

プリンさんはしどろもどろになりながら話し始めた。

「え〜とね〜。この子『音の海』を…認識？できるみたいよ〜？雪  
ちゃんと同じレベルだね。

あとはね〜。オリジナルがこの子にほんの一瞬だつたけれど接触  
してると思うわ。たぶんそれが後押しになつちやつたのね〜」

「で？」

「泣いてた理由を知りたかつただけなんだけれど〜。やっぱり欲し  
いんだけれど、駄目？」

リュウさんの方を上目使いに見ながらプリンさんは僕の喉を撫で  
つつ言った。

リュウさんは吸っていた煙草をもみ消してプリンさんを睨みなが  
ら言う。

「お前いい加減にしとけよ？」

「けち〜。この子ワタシのこと『プリンさん』って、可愛い名前で  
呼んでくれて〜。ワタシ嬉しかったから甘やかしてあげたかつたの  
に〜」

「…お前、さつき『この子、美味しい』って言ったる？」

味覚データのお前が『美味しい』って、相手どこまで喰つちまう  
かわかんねーじゃん」

「でも、このままは可哀相よ？…ん？もしかしてリュウが面倒を見  
るの？」

「俺しかいねーじゃねえか…」

「ふ〜ん？うふふふふ。それはそれで美味しそう」

プリンさんの妖しい笑い声にリュウさんは鳥肌を立てて青くなっ  
た。

「それじゃ、頑張つてね？」

そう言つとプリンさんは、僕を離し台所から出て行ってしまふ。

リュウさんは缶ビールを始末しながら僕に言った。

「聞こえてねーと思うけど、最初は風呂な？それから今日は俺のところで寝ろ」

聞こえてはいますよ？ただ…、頭の中に声が残らないんです…。

曖昧な意識のままの僕は風呂に入れてもらいパジャマとかを着せられベッドに寝かされた。

その間まで、何度も体に震えが走り変な声をあげる僕に、リュウさんは特に何を言うこともなく。

1つだけ大きく溜息をついて、リュウさんもまたベッドに入ってきた。

「俺が分かるのは『力』とか『神経』みたいなものな？」

だから、お前がどんな状態かは分かる。っつーか、同じ男として普通に分かる。

男と同衾とか嫌だろーが、感覚の調整するだけだから、少し我慢な？」

そう言いながら僕を抱き寄せ腕枕をしたリュウさんは、もう片方の手を僕の目の上に当てた。

リュウさんの腕の中、僕の思考を奪っていた体に走る甘い痺れが消えて行く。

お風呂に入ったからでも、ベッドに寝かされたからでもない。

春の陽だまりの中にいるような、眠りに就く直前のような、うっ

とりするような暖かさ。

体全体が温まって行くにつれ、次第に体の感覚も落ち着いていき、僕の意識が正常に戻って行く。

プリンさんのは『味覚データ』なんかじゃないと思う。

生きる力を欲望で引き出すもの。食の欲望も。性欲も。体の内に火をつけて自身の内から燃やすもの。焼きつくして行くもの。

照らし暖める太陽のようなリュウさんの暖かさ、対になるもの。  
…そんな気がした。

僕の目の上に当てられたリュウさんの手を、僕は両手でどかしな  
がら言う。

「ご迷惑おかけしてすみませんでした…」

「まあ夢でも見たと思っただけ。学習はしろよ？俺だってあいつ怖えんだから…。次は助けてやんねーからな？」

「はい…。でも、悪い人ではないんですよ？」

そう言った僕に、リュウさんは半身を起して勢いよく言った。

「おまつ！そんなんじゃないや次は最後まで喰われっぞ？！見かける前に気合いで逃げろっ！根性で気配を察するんだっ！」

びっくりして僕はぽかーんとリュウさんを見上げてしまった。

そんな僕を見て、リュウさんは片手で自分の顔を半分覆うと目を閉じながら言う。

「…はあ、参ったなー。自覚ねーやつに、言っても分かんねーか」

苦い口調で言いながら頭を振っていたリュウさんの動きがふと、止まった。

「って、…自覚させりゃいいの？」

言葉と共に目を開いたリュウさんは僕に視線を戻して微笑み、その笑みをゆつくりと華やかな艶やかなものへと変化させていった。

雪さんに似た、大人の花香の漂う顔ではあったけれど、今まで見ていたリュウさんの笑みはもっと、…明るく朗らかなもの。

蕾が綻び開き始めた花弁が、色を濃くして深みを闇を艶やかに増して行くように。

人の目を魅了する香りを放って咲き誇り、輝くような光を増して行くように。

大輪の華が咲き、魅了された者を嘲笑い、見下すような傲慢ささえ魅力的な。

リュウさんの人懐っこい笑みの下に隠されていた…人の形をしたナニカ…。

意識しないままのろのろと操られるように僕は起き上がり…、顔の半分を覆ったままだったリュウさんの手首を掴み外させ…、あらわになった視線を揺らがせることもない真っ直ぐで艶やかな笑みに、衝動が弾けた。

乱暴に肩を掴み引き倒し両手首を掴んで縫い付け、体で体を押さえつけ…、僕はリュウさんの肩に頭を押し付け衝動に耐える。

触れたい。もっと笑ってほしい。その顔を歪ませ怯えるところが見たい。もっと僕を見てほしい。僕に喘ぎ泣くあなたの声が聞きたい。もっと泣いてほしい。僕に乱れて咲いて行くあなたが見たい。

されるがままに抵抗もせず、引き寄せられるがまま倒れ、無言のまま押さえつけられている、あなた。

僕が何をしようとも関係なく手の届かない…あなたは今と同じ笑みのままだと、どこかで悟って何かがほろほろと崩れ落ちてく。僕が壊れて行く。

やがて肩口で泣きじゃくり始めた僕に、リュウさんは言った。

「あー。泣くな。よく我慢できた。よしよし。俺たちはお前の事が好きだけれど、いい人だろーが何だろーが、好きの意味を間違えん

なつてことだ」

そして泣き続ける僕をそのままに、リュウさんは誰に言うでもなく言う。

「なんだろ？作つたつて意識があるせいか、子供みたいに思つちまうのか？どーも甘やかしちまうな」

「落ち着いたか？」

そう言つて缶ビールを渡してくるリュウさんに、僕は小さな声で謝つた。

「すみませんでした」

あれから僕はリュウさんの顔をずっとまともに見る事ができないでいた。

下を向いたままビールをすする。

ふと、リュウさんが近づいてきて、僕の顎に手をかけると仰向かせた。

驚いた僕が思わず目を上げると、リュウさんの顔が近づいてきて…。

「や、だからさ。さつき、逃げろつて言つたよな？」

息がかかるほどの距離で見つめあい囁かれた言葉にも、僕はまともにも反応できなかった。

リュウさんは僕から離れると疲れたような溜息をついて缶ビールを煽りつつ言う。

「信頼してくれてんのはありがてーし、それを裏切るうとは思わねーんだがなー。俺もお前にたまにクルことがある。つても、理性を上回るほどじゃないからな？だがよー、ホントいーかげん危機感、持てよ」

その言葉と共に僕を見たリュウさんの流し目が色つぼくて、ソクリとしてよく分からないまま真っ赤になって慌てて下を向いた。

「…ワザとかつ？！ワザとじゃねーって分かつちやいるが。くそつ。

雪ーっ！とつとと帰ってきてこいつ調教し直しやがれーっ！」

僕から顔をそむけて窓の方へ叫んだリュウさんが呼んだ、雪さんの名前に反応しハツとして尋ねた。

「あ。あの…雪さんどこ行っただけですか？」

「ん？検査しに行ってるだけだから明日には帰ってくる。心配すんな」

「雪さん…どこか具合悪いんですか？」

「うんにゃ？いつもの事さ。昨日、熱出したろ？その検査。今朝は熱下がってたし」

「そーだったんですか…」

「あー。部屋に雪がいなくて声が出なくなるまで泣いてたのか？お前よく寝てたんで起こさなかつたんだが…。悪ーことしたな…」捨てられた』とか思っただん？」

リュウさんの発した言葉に僕の身体がビクッと反応してしまい、慌てて僕は言う。

「違いますっ！僕は…確かに組み上げられた人格を元に反応を返したりはしてませんが…」

言葉の止まってしまった僕にリュウさんが言う。

「最初は俺達なんかも『アイデンティティ』ってやつか？自分自身を見つげ出すのに苦労すんだわ。」

前の自分の記憶なんかも引き継いでいたりすっから。これは本当に俺の感情なのか？って、な？」

「僕も同じですか？」

「あー？どーだろ？ちと違ってたか？」

そう言つとリュウさんは傍らの机から煙草と灰皿を取り出し、窓を開けて言った。

「吸ってもかまわん？」

「あ…、はい」

リュウさんは深く煙草を吸い込み窓の外へと煙を吐くと、初めて会った時と同じような楽しげな笑みを浮かべて話始めた。

「前にちらつと言ったかもしれんが、雪がお前を望んだんだ。」

「だがな、オリジナルもお前の歌う歌とか好きだったんだそーだ。」

お前の人格の元になったソフトウェアが発売されるン十年も前に、お前の歌とか知ってたらしくスゲエ好きで探したらしい。

発売される前だぜ？どーやって知ったんだろーな？

俺たちが作られる理由はオリジナルがそれを望んだからもあるらしーんだが、大きな理由はそー言った現象の解明だな。

ただ…オリジナルも短い命だったんだが、作られた俺たちはもっと短けえ。少しずつオリジナルの回路を分けてんに保たねー。

俺は以前オリジナルに接触されたことあつてな？そのせーか今んとこ安定して長生きしてる。

だが、俺らを望んだクセによー、オリジナルは俺らにあんま興味無えみてーでな？

滅多に接触してこないんだが、たまにそれぞれに記憶のカケラを見せたり、その能力のカケラを見せに来たりはするんだが…」

窓の外を見つめながら黙り込んだリュウさんに、僕は言った。

「あの…。たぶんですけど…」

「ん？」

「自由に生きてほしいって思ってるんじゃないかと。リュウさんが僕に望むように…」

「へ？俺が？…お前に何望んでるっつーんだ？」

「はい。プリンさんがキスしていたの止めてくれたし。」

それにさつき、…ええと僕のこと襲いたくなるみたいなこと言つてましたよね？

僕が…あの…その…ですね…。リュウさんのこと押し倒した時、少しでも動かれたら僕何してたか分からないです…。でも動かなか

った。僕を跳ね除けて逆に押し倒すくらいのことできるのに。

雪さんも、僕が僕である事…なのかな？自分らしさ？を、持てるようになのかな？

最初は僕の元になったデータの人格に合わせた話しかしなかったし…」

「あー、なんだ？つまりあれか。一個人として、人として、認めてて、その上で自由に生きる、と？」

一生懸命話した僕の言葉をまとめた後、リュウさんは顔をしかめて言う。

「お前にオリジナルの記憶とかは入ってねーはずなんだが」

「夢を見たんです。発狂寸前で泣き叫ぶ雪さんを指してあれも幸せって、言っていました。」

それにたぶん僕の歌声は好きは好きでも、オリジナルさんは僕にも興味は無いみたいですよ。

僕の歌を求めたのは、僕を求めたのは、雪さんなんです」

「お前ホントにオリジナルに接触されたんだな」

「酷い人ですよね」

「まー、冷てえよな」

「なんで泣いてる雪さんを見て笑ってられるんですかねー？何も感じてないわけじゃないでしょーに！」

「って、おまつ！まさかの絡み酒っ！？」

「うつつっ、雪さんが可哀相です…。ぐすぐす」

「しかも泣き上戸とかありえねーっ！男のくせに泣くなー！うぜえ！」

リュウさんに泣きながら絡み、しがみついて泣いた僕は…いつの間にか眠ってしまったようだった。

「男に貸す胸なんかねーっ！」とか、いろいろ言うリュウさんの声を微かに聞きながら。



DATE：8・1 空在の理由（前）

DATE：8・1 空在の理由（前）

うつうつとまどろみ続ける僕の耳に、楽しそうに笑いさざめく声が聞こえてきた。

くすくすと笑うその声は、純粹過ぎるほど優しく包み込むような暖かさで愛を歌う。

けれどもどこか安心できない無視できない何か気がなった僕は、目を覚まして起き上ると寝ぼけ眼をこすりつつ周囲を見回した。

「あ。おはようございます。プリンさん」

「あら？起きちゃったのね？おはようございます」

部屋の入口で…たぶん、覗いてるつもりで、ドア全開な…プリンさんは楽しそうな声で言った。

「ええと…、リュウさん起こします？」

「いいのいいの。朝に弱いから起こすと怖いよ。それより、朝ご飯作ったから一緒に食べない？」

「えーと…」

昨日、確かリュウさんに何か大切な事を言われたような気が…。

「アイスを手作りしてみたのよね」

「今、行きますね！」

アイスの言葉に僕は満面の笑みを浮かべて、リュウさんを起こさないようそつとベッドから滑り降りた。

「あらあら、アイスで釣れちゃった。よっぽどアイス大好きなのね」

ころころと鈴を転がすような声で笑いながらプリンさんが言い、僕は台所へと降りて行った。

テーブルについた僕に、プリンさんはおかゆとお味噌汁と卵焼きとサラダを出してくれた。

プリンさんが僕と同じメニューを自分の前に置いて行ったが、その量はどれも僕の半分以下…。

「あの…プリンさん。僕、もう少し少なくとも大丈夫ですよ？」

「あら？あと5人分は作ってあるから、おかわりしても大丈夫なのよ？ワタシが食べる量少ないと思ったのね？」

「えーと、…あ、ごめんなさい」

「うふふ。食べてくれる人が居ればワタシは幸せなのよ。だから、冷めないうちにね？いただきます」

「あ、いただきます」

シンプルなメニューながら昨日と同じく、一口一口に驚きが走るほどの美味しい朝食だった。

朝の空気の冷たさに自分の身体も冷たく冷やされていたが、食べるにつれて心も体も温まって行った。

やがて食べ終わった僕がプリンさんの方を見れば、量は僕の方が多かったはずなのにプリンさんはまだ食べていた。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

僕の言葉にプリンさんは微笑みを浮かべてうなずきで答え。

ゆっくりと咀嚼し口の中のことを飲み込むと、プリンさんは席を立ちあがって、僕に暖かいお茶とバニラアイスを出してくれた。

「ありがとうございます」

僕がお礼を言うと、プリンさんは笑いながら言った。

「ちゃんとバニラビーンズと生クリームも使ったから美味しいわよ？お店のものには負けちゃうんだけどね」

優しいプリンさんの笑顔と手作りだと言うバニラアイスを前に、俯きそうになる顔をあげて僕はプリンさんに尋ねてみる。

「あのー、…プリンさんはどうして…あんなことを？」

「ん？それは昨日の事かしら？ワタシ謝らないわよ？」

「ええと、あのーですね…。謝ってほしいわけじゃ無くて…」  
動揺する事も無く変わらぬ笑みのまま、お茶を飲むプリンさん。  
考え込む僕を笑みを浮かべたまま見つめる、プリンさんの表情は  
なんのてらいもないものだった。  
かえって僕の方が視線をそらしてしまった。何かに負けた気がす  
る…。

「ふふふ。昨日の夜あれからリュウに何かされなかった？それで得  
た答えはあなたに必要なものだったんじゃないかしら？」

よく分らずにプリンさんを見上げると、プリンさんは教えてく  
れた。

「人はね、比べる事で知ることのできるモノがあるのよ。

溺れてしまうならそれでošimai。それもまたその人の出した答  
え。

リュウなんかになんか言わせればワタシはとてモチが悪いキチガイな  
んだそうよ？

作られたばかりのあなたじゃワタシに敵わない。ハードル高いリ  
ユウの方がいいから譲ったの。

あの男けっこう面倒見いいし。リュウは優しくったでしょ？」  
そこで僕を促すように見て、プリンさんが聞いてきた。

「はい！いい人です」

にこにここと笑って言った僕にプリンさんは自分の口元に握り拳を  
あてて「きゃあ」と言つて笑った。

何故か僕の背筋を悪寒が駆け抜けていく。あれ？

「うふふ。まあまあ。現実はこちらと分かってるから気にしないで  
ね？ただの脳内妄想だから」

僕の腕には何故か鳥肌が立っていて不思議に思ったけれど、プリ  
ンさんが楽しそうなので良しとしよう。

「そうね？もう一つだけ。あなたまだ『音の海』を怖いと思っ  
てるかしら？」

「……………」

プリンさんの言葉に僕は一瞬で固まった。

目を見開いたまま僕は何も言葉を返す事ができないでいる。

「あらあら〜。それじゃ質問を変えるわね〜？雪ちゃんのことも怖いと思っちゃってる？」

その問いに…僕は少し考え、けれども言葉が見つからずプリンさんを必死に見つめ、ただふるふるすると頭を振った。

ここで初めてプリンさんの表情が少し変化するのが見えた。

どこがどう変わったのかまでは僕には分からなかったけれど…、

プリンさんは初めて会ったときから僕に対しての表情を仮面のように貼り付けた『変わらぬ笑顔』だけで通していたから…。

変化したのは笑みだけでなかったようだ。

今までのようなどこか楽しそうな女の子らしい声ではなくて、少し低い落ち着いた声でプリンさんは僕に言った。

「在る物を在るがままに受け入れるしかないのよね。

認めてしまったその上で、ワタシは楽しんで笑ってる。

リュウには『お前は狂ってる』って言われるけれど…。

怖さも悲しみも痛さも辛さも、そういうものだと思ってる。

中には…、もしかしたらそれだけしか、ないものもあるかもしれない。

一つも喜びを見つucker事ができなくてもね、人間って笑う事くらいならできるのよ？」

どこか遠くを見るような目で話していたプリンさんは、僕を見てそこで言葉をいったん切ると、元の仮面のような笑顔に戻り、明るい声で言った。

「あら？いやーね〜？そんなに真剣に素直に聞かれちゃうと困っちゃうわ〜。

逃げたければ逃げればいいし、どうしてもなら諦めなければ、求めた形は変わるかもだけれどいつか手に入るとワタシは信じてるわ

）。

証明は、オリジナルと雪ちゃんとあなたがしてくれたんね？」

この話はおしまいとばかりに、プリンさんは改めて食事に戻った。仮面のような笑みに戻ったプリンさんは、これ以上は教えてはくれないだろう。

「アイス、いただきますね…」

僕は溶けかかったアイスを食べながら考えて行く。

大事な事を言われているような気がするけれど、プリンさんのお話はところどころ曖昧な笑みに隠されているみたいで、どういう意味なのか僕にはよく分からなかった。

このバニラアイス美味しい…。

DATE : 8 . 2 空在の理由 (後)

DATE : 8 . 2 空在の理由 (後)

僕は『音の海』の夢を思い返す。何度も。何度も。

何故、僕は『怖い』って、思ったのだろう？

何故、僕は雪さんを求めて手を伸ばした？

何故、僕は雪さんを『怖い』と思った？

プリンさんやリュウさんに、慰められ、諭され、その中に僕の心は答えを見たと思ったのに、それはするりと僕の手からすり抜けてしまっていた。

プログラムが出す答えなら、ただ笑って出迎えばいい。何もなかった。それでいい。

でも、心が感じてしまった『恐怖』だから、きつと心で感じて出さなければならぬ答え。

時間があまりない。

なのに…。

目の前では、起きて僕が居ない事に気づき慌てて探しに出たところで階段を踏み外して落ちたらしいリュウさんが台所に来たかと思えばプリンさんと静かな舌戦を繰り広げていた。

放送禁止用語に指定されているであろう言葉の応酬。

言葉の意味は辞書を検索すればすぐ出てくるけれど、僕の心はついていけなかった。

口ゲンカにしては2人とも静かな声でとても冷静に話しているの  
で、本当にケンカなのかどうかもよく分からない。

内容自体は、リュウさんは僕に対しての心配の気持ちは見て取れて、プリンさんはそんなリュウさんに甘やかすのもたいがいにする

よと言っような、僕の事での言い争いなのだけれど…。

ふと、僕の心に何かがひっかかってきた。

二人の声の、更にその奥底に潜んでいた思い。

「ああ、そっか。プリンさんはリュウさんのことが大好きで。リュウさんはプリンさんのことが大好きなんだ」

思わず口に出して言ってしまった僕の言葉に、周囲がしんと静まり返った。

よっやく一つだけ何かを見つけ出して、僕はもっと思えようとする。

が、あまりの静けさを疑問に思っ顔をあげると、そこで初めて二人がこちらを見ている事に気付いた。

「あれ？どうしたんですか？」

きょんととして二人の顔を交互に見て僕は言った。

僕の言葉にプリンさんはただ貼り付けた仮面で笑ってるだけ。

リュウさんはテーブルの上に突っ伏して頭を抱えてひとしきり唸り、何やらブツブツ呟き始めた。

「僕…、何か間違えました？」

二人の様子を見て僕が不安になり聞くと、プリンさんが僕にも一つバニラアイスを出してくれた。

「うふふ。どうしてそう思ったのかちょっと聞いてみたいけれど、言わなくていいわ」

アイスを出されて僕は、それが正解したご褒美のように思えた。

「あの…、雪さんの部屋に持つって食べてもいいですか？」

「あら？雪ちゃんの隣の部屋があなたの部屋になったから、そっちの方が良いと思うわよ？もうすぐ帰っってくるだろうし」

僕たちのやり取りに、リュウさんが顔をあげ言っってくる。

「あー。雪と彩、検査延びたから、帰るの明日の昼過ぎだったさっき電話あったぞー」

「えっ?」

「あら? そうなの?」

「別に具合が悪いわけじゃなくて、雪と彩との同調が切れたって話だ」

「まあ! やったじゃない! 雪ちゃんも彩ちゃんもこれで後10年は大丈夫ね」

その後、何が何だか分からない僕に、弾んだ声のプリンさんは「おめでとう」と、言った後「お祝いしなくちゃ」と、言いながら、足早に台所から出て行ってしまった。

投げやりな口調でリュウさんは、とても怖い顔をして「アイスに釣られてケダモノの口に飛び込むような真似はするな」と、散々に僕を叱りながら雪さん達の事を説明してくれた。

リュウさんの説明によれば、安定せずに短命で死んでしまう者達を二人一組の双子として作り出すと、互いに同調し合い補い合いその寿命が少し伸びるのだそうだ。

そしてその同調が切れた時、それぞれが個々の成長を始め、リュウさんやプリンさんのように長生きをする個体になるのだそうだ。

何故かリュウさんはものすごく嫌そうに、リュウさんとプリンさんもまた、その双子のつがいであった事を教えてくれた。

僕に関しては、体の素体がオリジナルとは別物であり、オリジナルの回路を分けずにはほぼ全て載せた後、全く違う人格を上書きしている為、双子でなくとも大丈夫なのだそうだ。

『理論上はな?』と、脅すように付け加えられたその言葉の裏には『もつと自分を大事にしろ』という響きがこもっていたような…そんな気がする。

共同生活のルールのようなものを教わったり、なんやかんやであ

っという間に日が暮れてしまい。

夜8時になっただら寝るようにと、一番最初に僕が目覚めた部屋の、いつの間にか運び込まれていたベッドに僕を押し込めた。

まだ作られて起動したばかりの僕は、赤ん坊までは行かなくとも、人間の子供と同じなのだそうだ。

暗闇の中、布団に包まりながら僕は思う。

雪さんだけじゃなく、彩さんも検査でいなかった。

僕がエラーを起こした日、夜に吞もつと雪さんに伝言していた彩さん。

僕の心の答えが出た。

「うん。たぶん、最初から、そういうことなんだ」

DATE：9 恋の記憶

DATE：9 恋の記憶

朝からそわそわと落ち着きの無い僕を、プリンさんが笑っていた。雪さんと彩さんを迎えに行くと言うリュウさんに、連れて行ってほしいとお願いした僕は、起動した日から1か月経たないと外に出られないからと言われ落ち込み。

それを見てまたプリンさんが笑い、肩を落とす僕はリュウさんに頭を撫でられたりしていた。

帰ってきたら『おかえりなさい』を笑顔で言おうと思っていた。それから僕の心を伝えたいと思っていた。

「おかえりなさい。彩さん」

笑顔で言った僕に、彩さんは少し震える声で言った。

「ただいま」

僕に声をかけられた彩さんが泣き出す寸前みたいな顔をしたから、僕は不思議に思った。

その彩さんの顔を見て、プリンさんの顔から笑顔が消えたことも、僕は不思議に思っていた。

リュウさんが抱きかかえて運んできた雪さんは、目を閉じていて「雪さん、寝ちゃったんですか？」

僕が問いかけると、リュウさんが少し硬い声で答えてくれた。

「あー。ちよつと疲れたんだろう。雪の部屋のドア開けてくれるか？」

「はい！」

返事をしてから僕は眠ってるなら仕方が無いかと、リュウさんの腕の中の雪さんを覗き込むようにして、小さく囁いた。

「雪さん、寝ちゃってるみたいだけれど。…おかえりなさい、ます

た」

きつと、僕の声は聞こえているはずだから。

雪さんをベッドに寝かせた後、リュウさんは言った。

「彩もちよつと疲れてるみたいだし、お祝いは後な？お前は雪についててやってくれ」

「はい。雪さんが起きたら、台所に行けばいいですか？」

少し考え込んだリュウさんは、雪さんのベッドの傍らに立つ僕に椅子を引つ張り出してきてくれた。

「とりあえず、座つとけ。まー、夕飯の時には呼びに来るから、それまで一緒に居てやれ」

「はい、分かりました。椅子ありがとうございます」

リュウさんに返事をしながら僕は椅子に座った。

「じゃー、俺は彩の方の様子見てくるから」

「あ…、はい」

雪さんが目覚めるのを待つ間、僕は今までの事を思い出したりして過ごしていた。

8日前の3時。

今またその時が近づいていた。

「雪さん早く起きないかなー？」

僕は椅子に座りながらも身を乗り出してベッドに頬杖をついて、雪さんの顔を覗き込むようにして見ていた。

一番初めに僕が目を覚ました時、初めて見た顔の見えないマスター。

顔が見えないのが怖くてあの時の僕は震えたのだと思っていた。

でも、違ってた。

『やっと、会えた』と、声に出して言われた時にも同じように、僕の心が怖さとは違うもので震えていた。

怖さと違うのは分かってても、それが何なのかまでは、その時の僕には分からなかった。

今ではそれが何なのか知ってる。

あの日、僕はどうして、雪さんの額にキスをしたのか？

その答えを、今では知ってる。

「そう言えば雪さんが先に僕にキスしたんだっけ。また、ラズベリ  
ー味のアイス食べたいな」

雪さんが起きたら話したい事がたくさんある。

それでちゃんと伝えて…。

そこまで考えた時、隣の部屋から3つ鐘が鳴るのが聞こえた。

「3時になっちゃった」

リュウさんやプリンさんと比べれば、雪さんの顔は顕著に幼さが残っている。

成長したら雪さんは、リュウさんみたいに色っぽくなるのかな？  
それともプリンさんみたいなの…ええと…癒し系？みたいになるのかな？

彩さんと話した時、彩さんから30過ぎて聞いたけれど、記憶の年数の事だったんだろう。

そう言えば少しだけ不安はある。

他の誰でもない僕の歌声を最初に好きになってくれたのは、オリジナルさんだった。

まあ、オリジナルさんに夢の中で会った時、僕自身には興味が無いようだったけど。

雪さん自身が僕の顔と声と、それに僕自身を好きでいてくれたらいいなと思う。

聞いたら教えてくれるだろうか？

つい、笑みがこぼれてしまう。

教えてくれても、くれなくても、きつと頬を染めるであろう雪さ

んが目には浮かんできて。

『音の海』は、正直怖かった。

でも僕は、狂ったように泣き叫ぶ雪さんが怖かったんじゃないじゃ無くて…。

そんな雪さんを前に、何もしてあげられないって事が怖かったんだ。

天までそびえ立つ高い崖を登れと言われていているような、遙か遠くに霞んで見える滝壺に飛び込めと言われているような、手の届かない雪さんへの、絶望と恐怖。

助けたい、守りたい、手を差し伸べたい。

そう決心していたからこそ感じた、絶望と恐怖だったんだって。僕の心はもうその時には決まっていたんだ。

その時、再び隣の部屋から鐘が鳴るのが聞こえてきた。

「4時になっちゃった」

待つのはもう怖くない。

彩さんが教えてくれた気持ち。

もう、間違えたりしない。

リュウさんが教えてくれた気持ち。

僕も諦めずに、笑うよ。

プリンさんの教えてくれた気持ち。

だから。

ねえ？マスター？目が覚めた時は傍に居て、一番にマスターに伝えるんだ。

僕自身の気持ち。

## DATE：？ 銀色の世界

DATE：？ 銀色の世界

あれから結局、何度、陽が昇り暮れても雪さんは目を覚ます事無く、幾度か季節も巡っていた。

眠り続ける雪さんのその傍らに寄り添って、目覚める時を僕は待ち続けている。

雪さんは少しずつ痩せていってしまつて、それでなくとも白かつた肌が今では、透き通るような白さにその色を変えていた。

次第に細くなっていくその体に、次第に透き通っていくような肌に：雪さんが雪みたいに溶けてなくなってしまうんじゃないかと不安になり、僕は目を離す事ができなくなりつつあった。

夜も雪さんの傍を離れようとしないう僕を見て、リュウさんは僕のベッドを雪さんの部屋に移してくれた。

夜は絶対に眠る事を約束させられたけれど。

毎朝いつも、窓のカーテンを開けて部屋に光を入れる。

そしてマスターに挨拶をしながら話しかけるのが日課になっていた。

「おはようございます。ますたー？雪が積もってますよー？とつてもキレイですー」

他のマスター達は、僕にとて優しく接してくれたけれど、優しくされればされるほど僕は首を傾げてしまつた。

『ワタシならこれで目を覚ますんだけれどね？』

プリンさんが超特大のプリンを作つて、雪さんの枕元で食べだして、部屋中がどこか懐かしい卵の香りと甘いバニラの香りに包まれた事があった。

そのプリンさんは、今では痩せてキレイになった。  
リュウさんと同じ顔のはずなのに男女差なんだろうか？性格の差  
なんだろうか？

リュウさんと違って婀娜っぽい艶やかさは微塵も無く、ただひた  
すらに可愛らしくおっとりしていて純真そうであらうに見える。  
性格は真逆だけど…。

相変わらずプリンさんは僕を襲おうとし、リュウさんは見た目だ  
けではそれと分からないほど静かに激怒して、顔を合わせれば口ゲ  
ンカが絶えない仲だけれど。

プリンさんはリュウさんの居ないところでは僕を襲おうとしない  
んだよね…。

彩さんは毎日アイスを買ってくるようになった。

以前、雪さんが僕に買いに行ってくれていた直営店のアイス…。

直営店までは自転車です30分ほど行ったところにあるのだそうだ。  
彩さんは運転免許を取得しに自動車教習所に通い始めていて、そ  
のついでだと笑っていた。

甘いものは好きではないと言っていたのに…、律儀にキツチリ5  
個買ってくる。

結局、彩さんは食べられなくて、僕が3個食べる事になる。

たまに、プリンさんが2個食べてくれるけれど。

リュウさんも彩さんも何も言わなかったけれど…。

雪さんが眠り始めて1週間くらいした頃に、プリンさんが僕にそ  
と教えてくれた事があった。

同調が切れる前なら、片割れである彩さんが起こす事も可能だっ  
たが、その望みは今は無いのだと。

同調が切れて10年ほど経ったマスター達は、長い眠りに落ち、  
それがまるで寿命だったとも言つように今まで目覚める事は無か

ったのだと。

以前、彩さんの方が眠りに落ちる事はよくあったが、雪さんが眠りに落ちる事は無かったらしい。

彩さんは定期的に眠りに落ちていたから体は健康そのものだったが、雪さんは体の方がボロボロになっていたので。

僕が来たのは、同調が切れなければ16歳になる前に2人共死んでしまうそのタイムリミットまであと半年を切っていた時だったとのこと。

真剣な顔のプリンさんの話を、僕は黙って静かに聞き続けた。「でもね、同調が切れてからすぐ長い眠りに落ちたのは雪ちゃんが初めてなの。」

もし作り直す事態になったら、記憶はたとえ同じでも、魂や心は別物になってしまう。

彩ちゃんとリュウはそうならないように努力してる。今日2人はその為に出かけたの」

プリンさんが話し終えて帰ってから、僕はずっと黙ったまま雪さんの顔を見つめていた。

雪さんが眠ってしまったから、時間は穏やかに流れ続けている。

ますたーに、僕はずっと驚かされる事ばかりだった。

僕に心を与えてくれたのに、眠ったまま。

穏やかな時間よりも、僕を驚かせてほしい。

たとえば、今その瞳を開けてくれるとか。

いつだったか一瞬だけ見せてくれたことのある、それはそれは綺麗な夢い微笑みを、もう一度、見せてくれるとか。

それを叶わぬ夢だとも言うように、雪さんは眠り続けている。

ならば、僕は…。

外ではまた雪が降り出したのだろうか。

空気が痛いくらいに、冷たく染み入るように僕の身体を冷やして行く。

雪が降り積もっている今なら…。

「起きてくれないと、やっちゃいますよ？」

僕はいつもより低めの声で、雪さんに覆いかぶさるようにして、その耳へと囁いた。

雪さんは相変わらず穏やかに眠ったまま。

僕は、雪さんの手を取ると僕の頬へと導いた。

瞳を閉じて耳を澄ます。

血の脈打つ音が聞こえ、隣の部屋の時計の秒針が聞こえ、台所から微かにプリンさんとリュウさんの痴話ゲンカの声が聞こえ、窓の外で枝に積もった雪が落ちる音が聞こえ、遙か高みに舞い鳴く物悲しい鳥の鳴き声が聞こえ、更に遠くへ、遠くへ。

一つも取りこぼす事の無いよう丁寧に音を拾っていく。

全ての音を聞きとるように、全ての音を取り込むように、どこかにいるはずの…雪の中で無言で泣き叫んでいるのであろう雪さんの、声無き声を探すように。

僕の中は、様々な音と響きに埋め尽くされて行く。

以前、聞いた事のある絶叫データの比ではない程の膨大な数の音。コンピューターではなく、僕の脳へと流して行く。

生身の身体が訴えてくる激しい頭痛に眉をしかめながら、知らず口元に笑みが浮かぶ。

どこか遠くで、雪さんの焦ったような声が聞こえた…そんな気がした。

いつかと同じ。

時折『僕の体』にスパークが走り、色彩を変える光は宙に踊りながら幾度も鋭い音を立てていた。

聞こえていた音の全てが遠くなり始め『僕の体』とその傍らに眠

る雪さんから、僕は離れていく。

同じ部屋の中とは思えないほどにその姿が遠くなった時、僕の視界は完全に真っ暗になる。

そして雪で覆われた世界に僕は立っていた。

その無音の世界の中に…。

雪さんの姿を認め、僕は走り寄って手加減も無く抱きしめる。

昔の、僕より頭2つ分背の低い姿のまま、抱きしめる寸前、僕を見て怒ったような顔をした雪さん。

笑ってくれなくても、いい。

『やっと、会えた』

思いを込めてささやいた声は、雪の中へと吸い込まれて行った。

< 終了 >

DATE：？ 銀色の世界（後書き）

DATEはこれでいったんおしまいです。

言い訳しか思い浮かばないくらいにいる駄目過ぎですが、読んでくださったみなさま、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8593s/>

---

DATE

2011年10月9日00時27分発行